

ガラテヤ書5章16節 「御霊によって生きる」

1A 信仰によって与えられた御霊

1B 心に書き記された律法

2B キリストにある神の愛

3B 愛の律法

2A 御霊による歩み

1B 満たされない肉

1C 肉の行い

2C 一新される思い

3C 十字架につける肉

4C 従順

2B 聖霊の実

1C 行いに対する実

2C 愛の特徴

本文

ガラテヤ人への手紙5章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、5章の前半まで来ました。今日は5章後半を見ていきます。午後に、一節ずつ見ていきますが、今朝は、そこから16節を取り組みます。「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。」

私たちは、ガラテヤ人への手紙で、キリスト者は自由を得るために召されたのだ、ということを学んでいます。律法によって、神の前で義と認められようとするればそれは奴隷状態だけれども、その束縛から解放された、ということを学んでいます。けれども、律法を強調したい人たちが、なぜ強調するかというと、「もし自由であるならば、自分たちの欲望のままに何でもやっていいと、放縦に走ってしまうではないか。」と心配するからです。人に、規制を課して肉の欲望を抑制しないとイケない、と考えます。

しかし、それは律法の生活に逆戻りしたガラテヤ人の生活で否定されていました。5章15節には、「5:15 気をつけなさい。互いに、かみつき合ったり、食い合ったりしているなら、互いの中で滅ぼされてしまいます。」となっています。律法による義を求めている中で、互いに裁き合って、相手を滅ぼすようなことを互いに行っていたのです。教会で、神学論争と称する中で、相手の人格を否定するよな発言をしばしば見かけます。また、何か教会で行われていることについて反対して、相手を面と向かって罵ることということさえあります。このような人たちは、「これが正しい教えなのだ」

また、「これが正しいやり方だ」と信じてやまないのが、かみついています。食いついています。律法の行いを求めている、肉に対して効力がないからです。

1A 信仰によって与えられた御霊

私たちが肉の欲望から自由になるのは、律法の行いではなく、信仰によるのだというのが、パウロの教え、福音の真理です。

1B 心に書き記された律法

律法の行いによっては義を達成できないことは、イスラエルの歴史によって証明されています。主がモーセに律法を与え、モーセは、守り行うように命じました。けれども、彼らは背き続けて、ついにバビロンによってエルサレムが滅ぼされてしまいます。主はそのことをエレミヤによって、何度となく語られましたが、そこで主は、アブラハムに対する約束をイスラエルに与えるために、その古い契約を更新することを考えられました。それが、新しい契約です。「エレ 31:33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」主がモーセに律法を与えたのは、石の板に書き記すことによってでした。けれども、それで違反しました。そこで主は契約を新たにします、更新します。それは、彼らのただ中に置き、心に書き記す、というもののなのです。律法そのものに問題があったのではなく、私たちの心が問題であり、その頑なな心のゆえに、戒めを見てもそれを破ってしまいます。それで、主が私たちに内側から変える、新たにすることによって、私たちが主に聞き従うことができるようにされたのです。

預言者エゼキエルは、この心を変える働きは、神ご自身の霊、御霊によることを預言しました。「エゼ 36:26-27 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。27 わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする。」神の御霊が、私たちの心に住んで下さり、私たちの心を石のように頑ななところを、肉の心に柔らかくさせてくださいます。それによって、主によって語られることを守り行うことができるようにしているのです。

2B キリストにある神の愛

そして、この新しい契約に入るのは、イエス様が最後の晩餐で語られたように、キリストが流された血によるものです。この方の流された血によって、罪が洗い清められ、御霊が私たちに洗ってくださいます。肉の行いがかなり酷かったコリントの町において、パウロが手紙を書きました。あらゆる肉の行いがありますが、しかしそれを全く変えられたのが、神の御霊ご自身です。「I コリ 6:11 あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」主イエスの名を信じることによって、神の御霊が与えられました。それで、淫らな行い、偶像礼拝、

そしり、そういった生活をしている者たちが、全く洗われ、聖なる者とされ、義と認められました。これだけの変化が与えられます。

そこで大事なのは、聖霊が神の愛が注がれます。「ロマ 5:5-8 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。6 実にキリストは、私たちがまだ弱かったころ、定められた時に、不敬虔な者たちのために死んでくださいました。7 正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません。8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」聖霊が、私たちが罪人であった時にキリストが身代わりに死なれたこと、ここにある神の愛を注いでくださいました。このような、人知を超えた愛は、人の世界には存在せず、聖霊によって初めて知ることができるのです。

3B 愛の律法

そこで、私たちは愛によって縛られました。神に愛されて、キリストに愛されて、それゆえこの方に従う、愛の関係に入りました。自分が律法を守り行うことによって、この方に認めてもらうことは必要なくなっており、すでにキリストを信じる信仰によって、この方に認められています。だから、戒めを行うのは、神に愛されているから、その愛に応答したいから行うのであって、認められるためではありません。

イエス様は、そこで律法は、二つの愛の戒めでまとめられることを教えられました。「マル 12:29-31 イエスは答えられた。「第一の戒めはこれです。『聞け、イスラエルよ。主は私たちの神。主は唯一である。30 あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』31 第二の戒めはこれです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。』これらよりも重要な命令は、ほかにありません。」神に愛され、神を愛します。そして隣人を、自分自身のように愛します。このようにして、愛によって働く信仰によって生きるのです。

2A 御霊による歩み

そこで、5章 16節のパウロの勧めがあります。「**御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。**」ということです。

1B 満たされない肉

1C 肉の行い

御霊によって歩めば、肉の欲望を満たすことがないということです。肉の行いとは何でしょうか？それは、肉体にある欲求に満たされて行うことです。5章 19-21節に列挙されています。「19 肉のわざは明らかです。すなわち、淫らな行い、汚れ、好色、20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、

憤り、党派心、分裂、分派、21 ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のものです。以前にも言ったように、今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。このようなことをしている者たちは神の国を相続できません。」

初めに列挙されているのは、性的な乱れですね。「淫らな行い、汚れ、好色」とあります。「淫らな行い」とは、結婚以外における性行為です。結婚前であっても、結婚外であっても、性行為は淫らな行いです。当時のギリシア・ローマ社会では、今の性の乱れに負けず劣らず、酷かったです。ローマ帝国は、性の乱れや快楽によって内側から衰亡していったのではないかと、と言われるほどです。けれども今も酷いですね。婚前交渉は、「一度試さないといけないではないか」なんていう意見までがあります。そして、「汚れ」ですが、純潔の反対語です。性交渉まで至らなくとも、例えばポルノ鑑賞はこれに当てはまります。また、行為のみならず、下品な会話もこれに含まれます。そして「好色」ですが、こうした逸脱行為を恥じるどころか、誇ったり、自慢したりする、やましさです。

そして、「偶像礼拝、魔術」とありますが、これは霊的な乱れですね。天地を造られたまことの神ではない偶像を拝みます。そこには悪霊の働きが付きまといます。そして、「魔術」があります。主なる神以外の霊と交流します。霊的な姦淫です。そしてこの言葉には、薬などを使って幻覚を見るようにするような、オカルトも含まれます。

そして、「敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ」とあります。これは知的な高慢に関わることです。これがガラテヤの人たちが、自分が正しいとして犯している誤りでした。敵意は人に対する敵意、憎むことです。そして、争いはそうした敵意を持っている相手を打ち負かそうとすることですね。そねみは、他の人が祝福されているのを否定的に話すこと、良くない感情を抱くことです。そして憤りは、感情を怒りでぶちまけることです。それから党派心は、自分の利益のために働きかけることですね。そうしたら分裂が起こります。分派は、一つまとまっているところに、また別のグループを作る行為です。

そして最後に、「泥酔、遊興」とあります。社会的な乱れと言ったらよいでしょうか。遊興の中で度を押し泥酔して、やってはいけないことを行ったりすることです。

これらのことは、世においては当たり前でしょう。けれども、パウロは、御霊に歩んでいけば、これらの肉の欲を満たすことはないと言っています。

2C 一新される思い

私たちが、信仰によって御霊が与えられると、先ほど話したように、思いが変えられます。肉の思いでいっぱいだったところから、御霊の思いが与えられます。「ロマ 8:6 肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です。」私たちが死に至る思い、先に列挙されていた行いに至る思い

でいっぱいだったところに、御霊の思い、いのちや平安が与えられます。ある人が言っていました。イエスを信じたけれども、その瞬間に何か劇的なことは一切起こらなかったそうです。ところが、テレビを観ていた時に、淫らな行いか、人を罵る言葉か分からないですが、「これは、間違っている！」と思ったそうです。今までは、当たり前のようにしていたのに、いつの間にか思いが変えられていたのです。

このような御霊の思いをもって、私たちは自分の思いを新たに変わっていくように勧められています。「ロマ 12:2 この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を变えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」

3C 十字架につける肉

これまでの肉による貪りに対して、律法は効力を発揮しないと先に話しました。けれども、御霊によって、十字架につけられたキリストがはっきり現れました。そのキリストにあって、自分の肉を十字架につけてしまうのです。「5:24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。」これまで、自分の肉の欲望のままに生きていたけれども、もうその生活に対しては死んでいます。古い自分が、キリストと共に十字架に付けられました。だから、それは過ぎ去ったことであり、古いことなのです。こう見なすことが、「十字架につけた」という意味です。ですから、私たちがどんなに肉の欲望が強かろうが、十字架は人がどんなにもがいても、殺すことができるように、十字架につけてしまえば、殺すことができるということです。

4C 従順

そして、御霊の力に頼ります。御霊は、必ず肉の行いを殺すことができます。「ロマ 8:12-13 ですから、兄弟たちよ、私たちには義務があります。肉に従って生きなければならないという、肉に対する義務ではありません。13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬこととなります。しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きています。」ここは興味深いですが、私たちには肉に対する義務はない、ということです。そう、私たちがこれまで肉に従わなくていいなんていう選択肢などないと思っていました。罪をやめられないと思っていました。ところが、止めようと思ったら、いつでも辞められることに気づきます。自分が変えられているからです。だから義務を負っていないのです。そして、御霊に従うのです。この方の導きがあるので、それに従うのです。そうすれば、からだの行いを殺すことができるのです。

2B 聖霊の実

こうやって、御霊によって歩むとは、御霊が思いと力を与えて下さり、私たちが積極的にこの方に導かれることによって行っていきます。これは、律法によって生きることではなく、キリストを信じる信仰によって、神の御霊が自分を動かして下さるのです。信仰によって生きるとは、御霊によ

て生きることです。律法の行いによって生きるのは、未だ肉の中にいるので、結局、肉の行いをするに至ってしまいます。

1C 行いに対する実

その違いを、パウロは「実」という言葉で示しています。「5:22-23 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、23 柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。」肉については「行い」であったのに対して、御霊は「実」であります。

この違いは、喩えれば、工場の製品と畑や園の植物の違いです。実は、工場とは違って、何か行えばできるものではありません。むしろ、根に留まる、茎に留まり、幹に留まることによって、その枝は実を結びます。自分が何をすればいいのか？ということも大事ですが、それ以上に、イエスご自身と一緒にいる、この方のみことばをずっと見つめる、そこに生きようとする、という、つながりの結果として、自ずと実が結ばれるのです。

そして、実は養わないといけませんね。水を注ぎ、養分を入れ、害虫があれば取り除きます。工場での製品であれば、一定の確立した行程を経て、製品ができあがりますが、実はそのようにはなりません。愛を込めて、養い、世話し、よく見張って、そうやることによって初めてできるものです。御霊の働きも同じなのです。

そして、何よりも自分の行為によって、生まれてくる結果ではないのです。天候や土の状況とか、自分ではどうしようもないところ、神に拠り頼むことによってのみ、出てくるのが実であります。収穫時に大雨が降って、これまで育てたのが台無しになることは、日常茶飯事なのです。主が、ちょうど良い時に結ばせてくださるのが実であって、何か行うことよりも、信じていくということが重要です。

2C 愛の特徴

そして、その実についてですが、ギリシア語に出ていて、日本語に出ていない文法があります。英語においても出ています。「御霊の実は」というところですが、is になっています。単数形なのです。いろいろな実があるように見えますが、実際は、実は一つだけなのです。それは「愛」です。喜び以降は、愛がどのように現れるのかについて、愛の特徴を列挙しています。神の愛、キリストの愛に御霊は私たちを満たして下さり、その愛が自分の生活から現れるのです。

喜びは、愛している時に抱いている意識ですね。神を愛している時、他者をキリストにあって愛している時にそこには喜びがあります。そして「平安」は、神と敵対していない、その愛によって味方して下さっている、ということです。そこに、私たちは深い平安を得ます。そして、寛容であります。これは、人に対して忍耐深いと言ったほうがいいです。コリント第一 13 章にも愛は我慢する、とありましたが、忍耐します。そして、愛は親切であり、善意に満ちています。愛は、誠実、あるい

は真実と言ってもいいでしょう、決して裏切りません。そして愛は、柔和です。仕返ししたりしません。そして、愛は自制です。御霊によって、適切に肉の欲求を制御できている状況です。

なんとすばらしいことでしょうか！罪深く、神から遠く離れていた自分が、ただキリストを信じる信仰によって、御霊が与えられたのです！そして、全く違う人間、キリストにあって新しい人間になったのです。キリストに似た者になることができます。この人を見たら、イエス様がどんな方なのか分かるようような、あまりにも大それたような変化を御霊が行ってくださいます。御霊によって歩みましょう。そうすれば、自分の肉の欲望を満たさずにすみませす。